

芸亭

Nara Prefectural Library and Information Center

奈良県立図書情報館

vol.10

うん

てい



辞書と思い出

千田 稔

今のように、電子辞書がなかった頃は、基本的な辞書以外の辞書を買うときは、何か動機があったはずである。だから今も手元にある辞書には、なにがしかの思い出が付きまとっている。

分厚い研究社の英和辞典は、正式のタイトルは、KENKYUSHA'S NEW ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY という。今も書店に並んでいるようだが、私は、大学時代の教養部の購読でシェイクスピアの「ロミオとジュリエット」がテキストとされることになり、普通の英和辞典では間に合わないと思い、わが身にはあわない大きな辞書を買った。

もちろん、「ロミオとジュリエット」はよく知られた作品だから、日本語訳は、多くあったが、シェイクスピア時代の見慣れない英語の意味を調べていかないと、教師からの質問に答えられなかったらいけないと、真面目な学生の一面もあった。

今では、その辞書が役に立ったかどうか、全く記憶にないが、貧しい本棚でこの辞書だけが存在感をもっていた。巻末に、「1963. 9. 29 千田」とブルーブラック色の万年筆で書いてある。奥書に「¥3,000」とある。2回生の後期の授業にそなえて、わずかな手持ちの金から、大枚をはたいたのである。今では2万円近い定価となっている。

この年に封切られた黒澤明の「天国と地獄」を映画館に見に行った記憶はある。となりの座席には、知らない人が坐っていた。「ロミオとジュリエット」とは無縁の22歳を寂しく生きていた。

Contents

巻頭言 辞書と思い出	1
調査相談カウンターから	2
司書の見方・味方・ミカタ 県内図書館・図書室 支援サービス	4
奈良のもの・ひと⑩ 「陀羅尼助とは」	6
地域資料から 質入れされた「鳴津殿」	8
知ってよかった 使い方・サービス (情報機器利用編)	9
イベント・展示より	10
所蔵資料紹介	12



REFERENCE SERVICE

調査相談カウンターから

“レファレンス・サービス”という言葉に耳にされたことはありますか。『図書館用語集』ではこれを、「情報を求めている利用者に対して図書館が提供する人的援助で、情報そのもの、または情報が含まれる情報源を提示・提供すること。貸出と並んで図書館の利用サービスの中心となる業務」としています。現在多くの図書館でレファレンス・サービスが展開されており、「調べたいことがあるけれど、どのようにすればいいかわからない」といった利用者の方が相談できる窓口を設けています。館によって名称は異なりますが、図書情報館では、3階に「調査・相談カウンター」として2席用意しています。以下に、実際にカウンターで尋ねられた事例を2題ご紹介します。

質問 01

イタリア発祥と言われ唐草模様が優美なロート・アイアンについて、その歴史などを教えてください。

「ロート・アイアン」、あまり聞きなれない言葉ですが、鉄製の唐草模様といえば、西洋建築に見られる大きな門扉や、階段の手摺などの美しい装飾が頭に浮かびます。

人の生活における鉄の歴史は古く、約9,000年前にはヒッタイト人やエジプト人によって使用されていたことがわかっています。その後、イタリアを始めヨーロッパ中に広がっていったようです。

鉄製の建築装飾は、10世紀までのものは風雪により腐食したり再生のために錆潰(いつぶ)されたりしていますが、かろうじて11世紀に英国に侵入したノルマン人が作ったと思われる、動物をモチーフにしたオーナメントが残っています。

11～12世紀からは、唐草模様が装飾モチーフの主流となっていったようです。13世紀後半には、全く新しい装飾技術として、浮彫のように写実的に見せるスタンプワークが流行しました。15世紀頃になると、イタリアのルネサンス様式が流行して装飾性が高まり、ねじり(Twist)の技法が使われはじめ、16～17世紀にかけて多く用いられました。このようにして、バルコニーや階段手摺などの装飾的な鉄工芸が展開していきました。



ロート・アイアンの門扉 (パリ)

ヨーロッパの美術様式は、バロック、ロココを経て、18世紀末から19世紀にかけて、新しいアートという字義どおりのアールヌーヴォーの時代になっていきます。彫刻や絵画だけでなく、建築、インテリア、装丁などの実用品が芸術の対象になったことが特徴で、まさに新しいアートでした。それによってロート・アイアンもさらに装飾化が進み、植物や動物、昆虫などのモチーフを用いた極めて曲線的なものが中心となっていきました。このことは、かつての建築装飾には見られなかった鉄の新しい可能性を見出したといえるでしょう。例えばベルギーの建築家ヴィクトール・オルタは、自身がデザインしたタッセル邸の階段の手摺などに、蔓が何本も伸び成長するような生命感あふれる作品を残しています。パリでは、エクトール・ギマルが1900年にデザインしたメトロのポルト・ドーフィヌ駅入り口や、パリのファサードコンクールで受賞したカステル・ベランジェの鉄扉などが有名で、現在もその美しい装飾を観ようと多くの観光客が訪れています。

唐草模様は、植物の茎や蔓の曲線に、葉や花、果実などのモチーフを合わせ、絡まりねじれながら伸びていく紋様です。エジプトやヨーロッパで古くから発見されていますが、日本でも6世紀ごろの副葬品で確認されていますし、仏教美術にも多く見られ、正倉院宝物でも見受けられます。



カステル・ベランジェの鉄扉

ロート・アイアンは、今では学校や洋館の門扉、住宅のバルコニーや手摺などのほか、ガーデンオーナメントとしても施工されています。日本でも東京駅の一部や、街のあちこちでその美しいデザインを堪能することができます。

調査相談は、知識が幅広ければ解決が早くなる傾向の強い仕事です。今回の調査によって初めてロート・アイアンという言葉を知りましたが、また同じような質問が来たときにはもっと早く文献を探そうと思っています。

さらに私自身街を歩いているとロート・アイアンが目飛び込んでくるようになりました。新たな知見を得るということは、図書館員としてはもちろんのこと、個人的にも嬉しいことです。この感覚をできるだけたくさんの人と共有したいと思い、今日も調査相談カウンターに座っています。

- 【参考文献】 ●南澤弘著『ロート・アイアン読本 The book of wrought iron』第3版よし与工房 2003年
 ●城一夫著『西洋装飾文様事典』朝倉書店 1993年
 ●視覚デザイン研究所編『ヨーロッパの文様事典』視覚デザイン研究所 2000年
 ●濱野節朗、中野仁人編『アール・デコの鉄工芸』岩崎美術社 1992年

(松村 順子)

質問

02

「生駒新道」という地名は今もありますか？ 無くなっているのなら、 どの辺りだったのでしょうか？

当館では奈良の地名についての調査をたびたび受けます。地名には名付けた人びとの思いや土地に根ざした歴史が詰まっているためでしょう、関心を寄せる人がたいへん多いです。調査は、まず角川書店発行『角川日本地名大辞典』や平凡社発行『日本歴史地名大系』を調べることから始めました。これらは大小様々の地名だけでなく、近世以前の郷・村、街道名も調べることができ、関連した歴史まで知ることができます。しかし、「生駒新道」という地名は載っていませんでした。

次に確認したのは『生駒市誌』です。自治体が編纂・発行している市町村史(誌)は、その地を調べている研究者たちによって一般向けにわかりやすく、学術的にも価値のある内容で書かれていることが多いため、レファレンスツールとして優秀な資料です。ここに、大正3(1914)年に大軌電車が開通して生駒駅ができ、これまで大阪から歩いて詣でていた宝山寺の参拝者が電車を利用するようになったため、生駒駅から宝山寺まで新しい参道が開かれたとあります。宝山寺は「生駒の聖天さん」と呼ばれ、古くから多くの信仰を集める寺院です。利便が良くなると参拝者も増え、門前の新道は賑わったようです。道沿いに茶店や旅館が並んで町ができ、この参道は新道と呼ばれたことが書かれていました。おそらくこの通称名の「新道」がお探しの「生駒新道」ではないかということで解決に至りました。

いろいろな方から様々な質問を受ける調査相談では、レファレンスツールやデータベースを使っても探し出せない時があります。その時は係全員で協力しながら、あらゆる手を尽くし調査を進めています。手がかりがなく行き詰まったとき、私たち図書館員の動力源となるのは、依頼された方の笑顔です。追いかけていた知識が頭の中にあつた知識と結び付いたとき、人はパツと顔が輝きます。その輝いた笑顔を思い浮かべ、調査に奮励努力します。

さて、上記を回答するとさらなる質問が返ってきました。「生駒の宝山寺と大和郡山藩・生駒山鬼寅谷修験道の関係について資料を教えてください。今は次から次へと疑問が生じ、調べる事が楽しいです」とのこと。次も期待に応えなければと力が入ります。



「ケーブル開通以前の仲之町(生駒新道沿)料理店」
(生駒市誌編纂委員会編『生駒市誌5 通史・地誌編』より)



『大軌電車沿線案内』大軌電車運輸課 大正末～昭和初期 [作成]

- 【参考文献】 ●編纂委員会編『角川日本地名大辞典』角川書店 1990年
 ●平凡社 [編]『奈良県の地名(日本歴史地名大系:30)』平凡社 1981年
 ●生駒市誌編纂委員会編『生駒市誌5 通史・地誌編』生駒市 1985年
 ●生駒民俗会編『古道に残る信仰の文字:宝山寺への道』生駒民俗会 1987年
 ●佐藤任著『湛海和尚と生駒宝山寺』東方出版 1988年
 ●寶山寺 [編]『般若窟生駒山寶山寺縁起』宝山寺 2000年
 ●築部章三執筆『靈感記の解説』寶山寺 1995年

(片山 智加子)



奈良県立図書館情報の 県内図書館・図書室支援サービス

奈良県内には12市15町12村、合わせて39の自治体がありますが、そのうち公共図書館または公民館図書室を持っている自治体がいくつあるかご存じですか？平成30年1月現在、その数は30となっており、南部東部地域を中心とした9村には、公共図書館も公民館図書室もありません。

身近に図書館や書店が無い場合、本に触れる機会が少なくなりがちです。そこで当館では、これら図書館未設置地域の小・中学校や小規模図書館などを対象に、読書環境充実のための支援事業として「子ども読書セット貸出」と、当館の司書が直接赴く「出前講座」を実施しています。

今回は、この取り組みについてご紹介します。

子ども読書セット貸出



●子ども読書セットとは

小学生と中学生向けの本を、絵本・読物・学習のカテゴリーに分け、あらかじめ設定したテーマに沿ってまとめたものです。現在、約60箱用意しています。

絵本セットには、1箱に小学校低学年から中・高学年を対象としたものまで幅広い本を収めています。中心テーマには、季節や年中行事に関するもの、翻訳も含めた古典・名作など、さまざまなバリエーションがあります。読物セットは小学生向けと中学生向けに分け、シリーズ物も組み入れています。両セットとも、児童・生徒がたくさんを選択肢から好みの本を探せるよう、違う本ばかりで構成しています。

学習セットは、調べ学習に利用できるよう歴史・人物史や年中行事などのテーマ別にセレクトしています。学校の授業の単元に合わせた参考資料として、また絵本セットや読物セットと同様に知識を得る本として、積極的に利用してもらえたらと思います。

セットは同時に3つまで、90日間貸出可能です。なお、絵本セットと読物セットは、1セット100冊で構成しています。

●申し込み手続き

利用を希望する施設は、まず中継窓口となる市町村立図書館や教育委員会に申し込みます。当館はそこから貸出依頼を受け、実際に利用する施設に直接セットを送ります。

貸出の種類は、申し込みがあるごとに届ける「希望申し込み」と1年間定期的に届ける「定期申し込み」があり、利用施設の約半数が「定期申し込み」を選択しています。

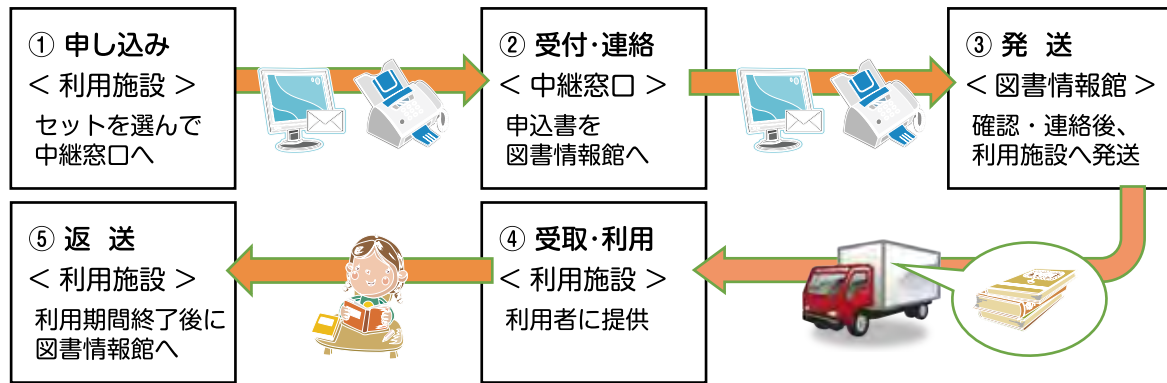
●利用料金

無料です。利用施設の費用負担はありません。



セット例（上から）絵本・読物・学習セット

利用の流れ



※定期申し込みの場合は、3ヶ月ごとに⑥から③に戻ります。また、同時利用できる3セットの内訳を「定期申し込み」と「希望申し込み」の組み合わせにすることもできます。



出前講座

当館では、「子ども読書セット貸出」サービス利用施設に赴いて出前講座を行い、司書がブックトークの実演などを通して本の分類や調べ方などを紹介し、セットのさらなる利活用を啓発する活動をしています。

司書が本と人を結ぶことで、本の利用は促進されます。分類番号順に並べておくだけでなく、テーマ別に選んだ本を展示して興味を引き出すことや、司書が話し手となって本を紹介する“ブックトーク”などで直接語りかけることも、本の利活用を促す工夫です。身近に公共図書館や書店がない場合、児童・生徒が本にふれる場所は学校図書室になります。出前講座で訪問した小学校の図書室は、新しい本が多いところや、常駐の学校司書や先生方による飾り付けがあるところなど、千差万別でした。



出前講座風景（三宅町立三宅小学校）

奈良県内では、「学校司書」や「読書指導員」など名称は異なるものの、生駒市・奈良市・平群町・王寺町で学校図書室への人の配置が進められています。また、ボランティアの皆さんが積極的に学校での読み聞かせなどの活動をされている地域もあります。さらに大和高田市・大和郡山市・宇陀市・田原本町などの公共図書館では、学校図書室への団体貸出や司書が直接訪問するなどの支援をされています。こういった支援の輪が、公共図書館未設置地域へも広がり、県内全域をカバーできればと願っています。

読書環境の充実や教育環境の地域格差解消のための一助となるよう、セット内容の更新も行いながら、このサービスを続けてまいります。ぜひこのサービスを通じて、当館が用意した本をご利用ください。

（安井 敬子）

陀羅尼助(だらにすけ)とは



陀羅尼助の製品

江戸時代、庶民にもてはやされた川柳に「だらすけは 腹よりはまず 顔にきき」というものがあります。これは江戸時代には強烈な苦味をもつ和薬「陀羅尼助(=陀羅尼助)」がすでに庶民の間になりに普及していた様子を伝える興味深い句です。

陀羅尼助は、和漢薬の中でも数少ないエキス剤の健胃整腸剤です。修験道の修練の場であり、大峯詣で大峯山に登った人たちにお土産としてよく買われてきました。この薬は、キハダという木の皮を乾燥した生薬黄柏を煎じてつくったエキスを、以前は竹の皮に包んで売っていました。昔から大和洞川(現在の天川村洞川地区)産のものが最も有名であるといわれています。

薬は、修験道の開祖である役行者が、大峯山中で創製して、これを洞川の先祖である後鬼に伝授したといわれています。よく効く霊薬として、また大和売薬の元祖として名を知られていて、

国内の有名な伝統薬や名薬を解説した『日本の名薬』という本の中でも取り上げています。この本の中では、古くからの言い伝えによるとして、役行者が齊明天皇3(657)年に藤原鎌足の病を陀羅尼助で癒したといわれる説を紹介しています。

「陀羅尼助(ダラニスケ)」という変わった名前ですが、これは強い苦味を有するので、昔僧侶が陀羅尼経を唱えるときに、口にふくんで睡眠を防ぐのでこの名がついたという説があります。また、陀羅尼経は病を癒すありがたいお経で、そのように万病に効く薬であるからとか、陀羅尼経を唱えながらつくったからなど諸説があります。

陀羅尼助の伝承・歴史

役行者

陀羅尼助を語るとき役行者をはずすことはできません。その昔、持統天皇の頃、役行者は疫病が大流行して人々が苦しんでいるのを助けるために、修練の道場としていた葛城の地、現在の御所市茅原にある吉祥草寺に大釜を据え、山中に自生する黄柏の木を剥いで煎じ、薬として人々にのませて疫病から救ったという伝承があります。これが大和における陀羅尼助の起源であると、伝えられています。



役行者像

役行者という人物は、いまから1380年程前の舒明6(634)年に、大和国葛上郡茅原郷、現在の御所市茅原の吉祥草寺のある地で誕生したと伝えられています。父は賀茂間影麻呂(賀茂間介麻呂、あるいは高賀茂真影麻呂ともいいます)で、役行者の家柄は代々葛城の加茂社に奉仕する仕事を行って来ました。行者は正しくは賀茂役君小角と呼ばれ、氏は賀茂役、姓は君、名は小角です。この葛城の地は豪族の葛城氏の領地といわれていますが、賀茂氏は土着の豪族として葛城の山の神を祭っていたとも伝えられています。

幼少の頃から信仰心が厚く、成長するにつれて、生駒山や葛城山などで修行した後、吉野山で蔵王権現を感得、以後修験道の創始者の一人として、また数々の超人的な呪術を使う行者として人々に敬われてきました。

険しい山岳での厳しい修行を通して、身を助ける手立てを山野に自生する草花に見つけ、採取し利用する。その経験上の成果の一つが陀羅尼助の創製につながったのかもしれませんが。

大峯

奈良県の南部、大峯山系に位置する吉野から山上ヶ岳を中心にした一帯は、昔から金峯山と云われていました。役行者

に縁のあるこの地は修験道の修練の場として、また、平安時代にはすでに「山上詣り」という大峯山参拝登山が始まり盛んになっていました。この時代には皇族や貴族も含めて多くの参拝者が訪れていたようです。

寛弘4(1007)年の8月には関白藤原道長が大峯山にお経を埋納したり、寛治6(1092)年7月には白河上皇も参拝したことが記録されているそうです。



洞川

この金峯山信仰は時代の経過とともに参拝のかたちや宿泊場所の変化もあったようです。宿泊場所については、山上ヶ岳の麓に位置する洞川の里が、「山上詣り」の基地として山岳信仰の隆盛とともに栄えてきました。洞川は現在の天川村の北東にあり、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」にも含まれ、修験道と深い結びつきを築きながら、宿泊業を中心に生業をしてきた地域です。この地域は、万治(1658～1661)年間頃に作成された原図を下敷きにして作られた古い図面に、寺院や相当数の家屋も記されていて、一定規模の集落がすでに存在



していたことを示しています。

昔から近畿を中心に近隣の人々が山上講をつくり団体で大峯山に詣でていたようで、洞川ではお詣りの人たちを受け入れる宿泊施設を提供していました。その様子は近松門左衛門の『女殺油地獄』の中にも描かれ、太田南畝の『一話一言』では、洞川で作られる陀羅尼助の見聞記も記されています。一方、洞川の人たちは麓での販売とともに販路を拓げ、山上ヶ岳への登る途中に、小屋をかけて、陀羅尼助を売るようになりました。天明7(1787)年につくられた『大峯山中秘密絵巻』や江戸後期の博物学者で本草家の畔田翠山

が弘化(1844～1848)年間に著した『和州吉野郡群山記』などの絵巻や地誌に陀羅尼助などを商う小屋の様子が描かれています。

いろいろな資料に出てくる陀羅尼助

陀羅尼助の名は文楽や人形浄瑠璃の演目『義経千本桜』(延享4(1747)年上演)や『役行者大峯桜』(宝暦元(1751)年上演)の中にも見られるところから、江戸時代の中頃には、民衆の中になんまり普及していたようです。

川柳や俳句、落語にも登場する陀羅尼助ですが、文化4(1807)年に編まれた『誹風柳多留』第38編には「だらすけを のんで静は 癩をさげ」という句が見られます。その他、地誌や紀行文、小説といった文学作品の中にも登場します。

幕末の慶応3(1867)年には、ヘボン式ローマ字の創案者ヘボンが発行したわが国初の和英辞書『和英語林集成』に、「Daranisuke, or Darasuke, ダラニスケ 陀羅尼介, n. A kind of bitter medicine.」として載せられています。

一方、陀羅尼助を扱う業者には「客帳」というものがあり、そこに記されている地名を見ると近畿地区はもとより北は秋田県の出羽地方や奥羽の各地方、南は九州の各地域が確認できるそうです。



薬としての陀羅尼助

陀羅尼助の主原料はキハダという木の皮を乾燥させた生薬黄柏です。主成分としてベルベリンなどのアルカロイド類を含み、成分の薬理作用も、胃腸機能の促進作用、抗菌作用、下痢止め、抗炎症作用などが解明されているそうです。

この純粋エキスは粘着性が強く、以前は竹の皮などに延ばして通称「板」といわれて売られていました。この「板」は取扱いにくく服用しにくいので、近年はガジュツやゲンノショウコなど他の胃腸薬を加えて成型した丸薬が販売されています。

黄柏は非常に苦い健胃薬で腸内の殺菌作用や整腸、消炎薬としての効能もあるそうです。ちなみに、陀羅尼助(丸)の最近の効能書には「食欲不振、胃部・腹部膨満感、消化不良、胃弱、食べ過ぎ、飲み過ぎ、胸やけ、胃もたれ、胸つかえ、はきけ、二日酔い、嘔吐、整腸、便秘」などがあげられています。外用としてはベルベリンの抗炎症作用もあるそうですが、効能書には明記されていません。

効能の中で腸内の殺菌作用や整腸作用があるためか、海外旅行など水が変わるところに行くときやコレラなどの流行する地域にはよく持参されるようです。

洞川以外の陀羅尼助

洞川以外の陀羅尼助としては、大和盆地の西端に位置する古刹當麻寺の中ノ坊において、古い製法を守って作られていたものがあります。こちらは毎年一月の寒の入りに陀羅尼経を唱えながら大釜でキハダを煮つめて、そのエキスを小さい板上に分けて製造していました。その他の地域としては、滋賀の伊吹山陀羅尼助、高野山陀羅尼助、鳥取大山の「煉蕉」、木曾御岳の「百草」、四国では石鎚山の「陀羅尼薬」など地名を冠したり、名称を変えて製造・販売されているようです。いずれの地域でも修験道の山伏達持薬として持ち歩いていた陀羅尼助が関係しているようで、その土地ごとの伝承や吉祥譚と結びついて広く庶民に普及していったようです。

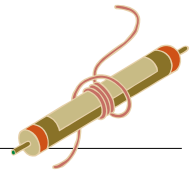
草根木皮の和漢薬から作られて、身体にやさしく、古い起源をもつ陀羅尼助ですが、確かな薬効により、大和では現在も重宝されている家庭の常備薬になっています。

※本稿中に掲載の写真は、天川村地域政策課および銭谷龍平氏(天川村洞川在住)よりご提供いただきました。

参考資料

- 銭谷武平、銭谷伊直編著『陀羅尼助：胃腸妙薬 伝承から科学まで』業日新聞社 1986年
- 銭谷武平著『大峯こぼれ話』東方出版 1997年
- 天川村【編】『天川村史』天川村 1981年
- 奈良県教育委員会文化財保存課編『天川村民俗資料緊急調査報告書1』奈良県教育委員会 1975年
- 宗田一著『日本の名薬 売薬の文化誌』八坂書房 1981年
- 「今日見心親やまとの種々陀羅尼助」(『あかい奈良』通巻第6号 1999年12月10日 冬号)
- 「大和国1500年の薬草のはなし(特集奈良の秋草一万葉の草々と薬草のはなし)」(『月刊大和路ならら』第144号 2010年9月) (鈴木 陽生)

質入れされた「鳴津殿」



当館では平成28年度以来、所蔵する表野家文書のデジタル化を実施しています。表野家は戦国時代には宇智郡(現五條市)の小規模な領主でしたが、江戸時代は帰農し同郡大津村の庄屋を勤めるとともに医者としても活動しました。今回は表野家文書の中から1通の借用証文を紹介します。

慶長10(1605)年、廻向院応仙なる僧侶が表野家の助右衛門から銀子1貫目を借りました。その際廻向院は坊屋敷(廻向院の建物と敷地か)と旦方(檀那)の「鳴津殿」を質に入れました。人間が質入れされたのではなく檀那の権利と見るべきでしょう。銀子を借りた廻向院応仙は高野山の僧侶です。大津村は紀伊との国境に近いことから奈良盆地よりも高野山など紀伊との関わりが深い地域です。

質入れされた「鳴津殿」が誰かについては、高野山に宿坊が多数存在することと関係します。日本各地の檀那たちは高野山に参詣する際に自分の宿坊に宿泊するのです。廻向院を宿坊にしていた中に薩摩藩主の島津家がありました。そのため「鳴津殿」は島津家のこととわかります。

「鳴津殿」を質にとった助右衛門ですが、借用証文にも署名している来蔵院勝算から「檀那を質に取っても遍帳がなければどういふものだろうか」と言われています。遍帳についてはわかりませんが、檀那の権利に必要なものであったと考えられます。ところで、助右衛門は廻向院から檀那を質に取ってどうしようというのでしょうか。表野家では高野山西方院に一族の子弟を入れていました。宇智郡や紀伊・和泉では、地域の有力者は子弟を高野山に送り込むことが多かったといえます。もしかしたら、助右衛門は檀那「鳴津殿」を西方院に渡すつもりだったのかもしれませんが。

さて、質入れされる格好となった島津家とはいうと、この件が一因かは不明ですが慶長13(1608)年に高野山蓮金院を買い取り新たに宿坊にしています(『島津家文書』1506~1509号)。しかし以前から宿坊であった廻向院を放っておくこともできず、数年にわたって銀子を送っています(『旧記雑録』後篇4)。この銀子については「廻光(向)院御再興之入目」と記され、廻向院が当時おかれた経済的状況を窺わせます。そもそも自身の坊屋敷を質入れするほどですから相当困窮していたのでしょう。島津家からの援助のおかげか廻向院は銀子を返済できたようで、借用証文の裏には慶長18(1613)年に利子の支払いが終わったと記されています。廻向院は持ち直したようですが、大坂の陣で豊臣方についたため、島津家から宿坊を替えられてしまいます(『旧記雑録』後篇6)。

廻向院はともかく、注目すべきは助右衛門の活動です。江戸時代初めの表野家は大津村や周辺の村々の年貢徴収を請け負う地域の有力者でした。年貢として徴収された穀物は表野家にあった「御蔵」に保管されており、領主に上納されるほか農民たちへの融通や地域の行事に出費されることがありました。廻向院が借りた銀子も表野家が「御蔵」の穀物を銀子に換えたものかもしれません。



借用申銀子之事(請求記号:89-15-1.9)

【参考文献】

- 大和国宇智郡大津村表野家文書[来蔵院勝算書状廻向院之遍帳二付](請求記号:89-16-3.8)
- 久留島典子「戦国~近世初期における大和宇智郡の国衆と村落」(勝俣鎮夫編『寺院・検断・徳政』山川出版社, 2004年)
- 熊谷光子「近世初期大和宇智郡の小領主と地域」(大阪歴史学会編『ヒストリア』198号, 2006年)
- 東京大学史料編纂所編纂『島津家文書』第2巻 東京大学出版会, 1971年
- 鹿児島県維新史料編さん所編『旧記雑録』後編4 鹿児島県, 1984年
- 鹿児島県維新史料編さん所編『旧記雑録』後編6 鹿児島県, 1986年

(酒井 雅規)



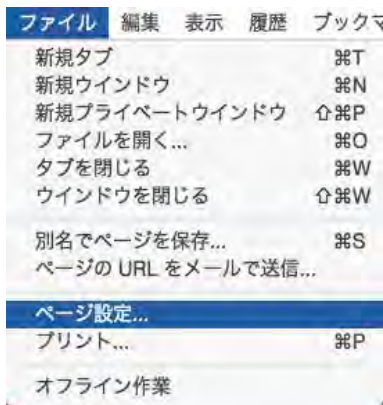
館内設置の情報機器の利用について、よくお問い合わせのある使い方・サービスを2つ紹介します。

no.1

Mac 端末からカラー印刷ができない。カラー印刷するにはどうしたらいいの？

Firefoxからの印刷を例に説明します。

- ①画面左上の「ファイル」メニューをクリックし、「ページ設定」を選択します。



- ②[対象プリンタ]から[pr000]を選択し、[用紙サイズ][方向][拡大縮小]を選択します。



- ③画面左上の「ファイル」メニューをクリックし、「プリント」を選択します。

- ④[プリンタ]が[pr000]になっていることを確認し、[詳細を表示]ボタンをクリックします。



- ⑤[部数]を設定し、必要に応じて[背景色をプリント][背景画像をプリント]にチェックを入れます。

- ⑥[Firefox]を[プリンタ機能]に切り替えて[白黒/カラー]を選択します。



この[Firefox]を[プリンタの機能]に切り替えるところが分かりにくいようです。この部分をMacでは、「プリントオプションポップアップメニュー」とよび、詳細な設定はここでおこないます。

no.2

オーサリングルームからAdobe Photoshop がなくなった。どうやって印刷すればいいの？

—昨年のAdobe社との契約更改により、オーサリングルームほか、館内の端末からPhotoshopやIllustratorが無くなってしまいましたが、以下のソフトで印刷いただくことは可能です。

- Windows標準のフォトビューアー
- Inkscape
- GIMP
- Mac標準のプレビュー

ただし、InkscapeやGIMPでは、印刷プレビューができないなどの制約はあります。

また、持込パソコンをUSBケーブルでオーサリングルームのプリンタにつないで、印刷いただくことも可能です。この場合は、ご自身が契約されているAdobeソフトから印刷することが可能です。

プリンタドライバは、持込のパソコンにあらかじめインストールしていただく必要がありますが、オーサリングルームで実際にプリンタにUSBケーブルでつないだ状態で、Internetに接続してインストールいただくのが手っ取り早いです。

(川畑 卓也)



■ Course

聖徳太子を学ぶ連続公開講座 ～わが町と聖徳太子～(全7回)

県内6地域に図書館を『出前』
ゆかりの地をめぐるウォーキングも



「聖徳太子を学ぶ連続公開講座」、昨年度に続く第2シーズンのサブタイトルは「わが町と聖徳太子」。聖徳太子の居住地・斑鳩から、都のあった飛鳥地方を結ぶ「太子道」に焦点をあて、連続講座を催しました。

今回の「出前」先は明日香村、三宅町、斑鳩町、田原本町、安堵町、王寺町。各地域の観光ボランティアガイドらが、聖徳太子にまつわる「ご当地」遺跡や伝承に

ついて解説したほか、明日香村と王寺町ではウォーキングイベントも併催。また、千田館長は聖徳太子の生涯を絵画化した『聖徳太子絵伝』をテーマに、連続7回の講座を行いました。

合わせて各講演会場前には「利用者カード」をその場で発行するサービスカウンターや、当館所蔵の「講座関連本」が借りられるコーナーを設置しました。

《開催地(2回目から)・開催日・場所・講演テーマ&講師》

- 第1回「特別講演」、9月18日[月・祝]、図書館1F交流ホール、「太子道周辺の古代寺院跡」大西貴夫 奈良県立橿原考古学研究所指導研究員、「聖徳太子絵伝を読む①」千田稔 図書館館長
- 第2回「明日香村」、10月1日[日]、明日香村中央公民館、「聖徳太子にまつわる遺跡群」相原嘉之 明日香村教育委員会文化財課長、「聖徳太子絵伝を読む②」千田稔、ウォーキング「橘寺への散策」引率/解説:飛鳥京観光協会 観光ボランティアガイド
- 第3回「三宅町」、11月19日[日]、三宅町文化ホール、「太子道周辺に残ることがらについての語り」ほか 三宅町・語り部の会うべな座 三宅ボランティアガイド、「聖徳太子絵伝を読む③」千田稔
- 第4回「斑鳩町」、12月15日[金]、いかるがホール小ホール、「聖徳太子といかるが」柏尾信尚 斑鳩の里観光ボランティアの会、「聖徳太子絵伝を読む④」千田稔
- 第5回「田原本町」、1月27日[土]、田原本町民ホール、「田原本の聖徳太子伝承」田原本町観光ボランティアガイドの会、「聖徳太子絵伝を読む⑤」千田稔
- 第6回「安堵町」、2月3日[土]、安堵町福祉保健センター2階視聴覚室、「太子ゆかりの伝承・史跡リレートーク わが町と聖徳太子」安堵観光ボランティアの会、「聖徳太子絵伝を読む⑥」千田稔
- 第7回「王寺町」、3月24日[土]、王寺町地域交流センターリーベルホール、「片岡の寺と聖徳太子」岡島永昌 王寺町教育委員会学芸員、「聖徳太子絵伝を読む⑦」千田稔、ウォーキング「太子ゆかりの寺巡り」引率/解説:王寺観光ボランティアガイドの会

■ Book talk

岩波文庫から日本文化を考える 連続対談 (全3回)

日本の出版界が誇る「古典の宝庫」から
厳選タイトルをテーマに識者が語る



岩波文庫は岩波書店創業者岩波茂雄が1927年に創刊。以来、累計約六千点にもおよぶ諸分野の名著名作を刊行し続けています。日本の出版界が誇る「古典の宝庫」を顕彰し、日本文化について考える連続対談を開催しました。

対談は、各回、岩波文庫の総タイトルから厳選した「お題本」を元に、識者が対談を行う構成で展開しました。

第一部「アジアについて考える」に向けての選書は、《近代美術の父》岡倉覚三の『茶の本』(1906年)。

本書は、岡倉が「茶」を西洋人に理解させるために英文で書き、ニューヨークの一書店から出版されるやベストセラーとなった後、1929年に邦訳された、いわば「逆輸入本」で、茶道の基本的な説明のみならず、岡倉独自の文明論としてまとめられた名著として知られています。

岡倉が渡米した当時、諸外国で活躍する日本人はまれな存在でした。逆境の中、崇高な志とフロンティア精神をもって「日本の精神性の最も美しい面」を、茶の湯を通じて表現し諸外国に伝えた、岡倉の人生哲学と美学に思いをはせる内容となりました。

第二部「日本文化開眼」では、會津八一『自註鹿鳴集』と、和辻哲郎『風土』の二冊について、それぞれ対談を。

第三部「西洋への接近」では、寺田寅彦『柿の種』を題材に理化学研究所(埼玉県)と当館をインターネットで結び対談を行いました。

《テーマ・開催日・対談で取り上げた岩波文庫タイトル&登壇者》

- 第一部「アジアについて考える」:11月18日(土)、対談①「岩波文庫からみた大和」—歴史・人・書物— 鹿谷勲氏(奈良民俗文化研究所代表)×千田稔 (図書館館長)、対談② 岡倉覚三『茶の本』 鍵岡正謹氏(元岡山県立美術館館長)×池田久代氏(元皇學館大学教授)
- 第二部「日本文化開眼」:12月17日(日)、対談①會津八一『自註鹿鳴集』神林恒道氏(新潟市會津八一記念館長)×中田紀子氏(エッセイスト)、対談② 和辻哲郎『風土』—人間学的考察— 野澤秀樹氏(学校法人九州学園理事長)×千田稔
- 第三部「西洋への接近」:1月12日(金)、寺田寅彦『柿の種』 松本紘氏(理化学研究所理事長)×横矢直和氏(奈良先端科学技術大学院大学学長)※理化学研究所と図書館をインターネットで結び対談を行った。

《開催場所》

図書館交流ホール

図書情報館開館とともに始まった千田稔図書情報館長とゲストによる公開講座「図書館劇場」(年6回)は12年目を迎えます。ほかに、落語会、コンサート、能楽や朗読の公演、ビブリオバトル、こもり観察会、各種相談会、古文書講座、マーケット、パネル展示など、多彩なイベント・展示を開催しました。

※文中敬称略、特記のない催しは当館主催事業

■Talk event

くるみの木 石村由起子×オフィスキャンプ 坂本大祐 それぞれがつくる「場」のはなし

日々の暮らしを大切に。心地よい空間と豊かな生活のために必要なこと



カフェと雑貨の店「くるみの木」など、奈良市内と東京・白金台で4店舗を展開するとともに、国内外の企業や自治体などの商品開発や町づくりを提案する「奈良生活デザイン室」を率いる石村由起子さんと、大阪出身で東吉野村へ移住し商品やプロジェクトなどの企画立案などを手がけるデザイナー坂本大祐さんのトークイベントを開催。

200人を超す聴講者に向け、お話をいただきました。

石村さんは、くるみの木をオープンした1984年当時を回想し「求められない時間が長かった」と述懐。「でも、ブレずに『心地よさ』や『喜びが感じられるシンプルさ』を追求し続けた結果、創業から35年経ても変わらず受け入れられるスタイルを確立できたのかも」と、自身のセンスの源泉や長続きの秘訣を示唆。人気店のオーナーの声を直接聞くことができる機会とあって、熱心にメモを取る聴講者や、講演会の続編を望む声が多く聞かれました。

本イベントは2016年に設立された「なら・図書館に集う会」の主催により行いました。



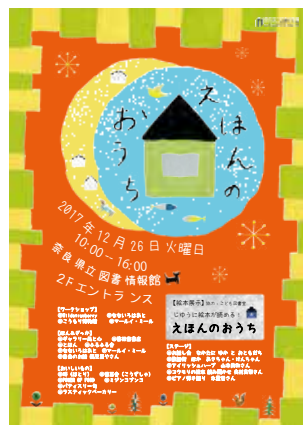
石村さん(右)と坂本さん

- 《開催日》
1月7日[日]
- 《場所》
1F 交流ホール
- 《主催》
なら・図書館に集う会
- 《共催》
図書情報館
- 《コーディネーター》
小嶋宏平 図書情報館副館長

■Event

えほんのおうち

「絵本」がテーマ。400冊が勢揃い！
大人も子どもも楽しめるマーケット



絵本をテーマにしたショップやステージ、ワークショップが楽しめるイベント「えほんのおうち」を開催。大勢の親子連れらで賑わいました。会場の2Fエントランスには、「こども図書室」(毎月第二土曜日当館授乳室で開催)の所蔵本と、ボランティアスタッフの協力で集まった合計400冊の絵本が並ぶスペースを中心に、アイリッシュハーブの演奏、紙芝居、腹話術、絵本の読み語り、ピアノ演奏&歌などのステージパフォーマンスや、絵本の新刊本&古書の販売、フード&スイーツの屋台、絵本のキャラクターにちなむ雑貨作りのワークショップを展開。絵本から着想したさまざまな試みを繰り広げました。



ずらりと並んだ絵本の中からお気に入りの一冊を手にとった子どもたちには、当館司書とボランティアスタッフが声かけをし、絵本の世界へと誘いました。



- 《開催日》
12月26日[火]
- 《場所》
2F エントランス
- 《協力》
こども図書室
- 《企画協力》
たばたようこ



所蔵資料紹介

こうふうしゅう
『興風集』田中屋治兵衛
1868年

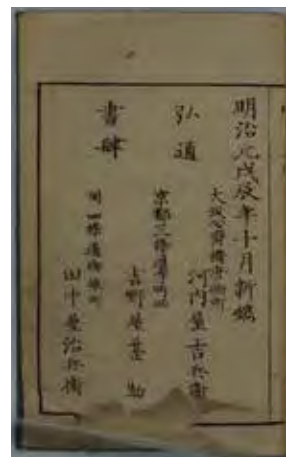
特色のあるコレクション

2018年は、明治元年から起算して満150周年の年に当たります。つまり明治元年は、1868年1月1日から12月31日までの事になるわけですが、改元の詔書が出されたのは1868年9月8日。それまでの元号は慶応4年でした。従って、本の出版年などの記載は9月7日までは慶応、9月8日以降は明治と記されていたものと思われ、明治元年の記載がある本は約4ヵ月しか発行されなかった事になります。当館では、明治に改元した直後である、明治元年10月に発行された本『興風集』を所蔵しています。

『興風集』は幕末の長州藩士・久坂玄瑞が集めた詩文をまとめた詩歌文集で、「安政の大獄」で獄死・斬首など不遇の最後を遂げた志士たちの詩文が収められています。「追懐古人詩十首」をはじめとした、吉田松陰、梅田雪浜、頼三樹三郎、月性らの詩歌の他に、水戸藩士・蓮田市五郎の遺書なども収録されています。

編者である久坂玄瑞は貧禄の藩医の生まれですが、国事を論ずる吉田松陰に師事して松下村塾に学び、「高杉晋作の識、玄瑞の才」と並び称された人物です。元治元(1864)年に亡くなっていますが、『興風集』の奥付には「明治元戊辰年十月新鐫」とあり、刊行は久坂玄瑞が没してから4年の後に、松下村塾の手によってなされたようです。

なお、「鐫」という字には彫るという意味があり、「新鐫」は新刻、新版というような意味です。当時の出版は木版印刷が主流で、版面のように文字を彫った木の板に墨を塗り、紙に摺ったものを綴じて一冊の本の形にしていました。和装本で、本の発行に木版を使っていた時代らしい言葉です。



このように、江戸から明治にかけての時代の移り変わりが感じられる『興風集』ですが、他の図書館の蔵書検索やインターネットなどで検索してみると、出てくるのはほとんどが別の『興風集』に関する資料です。そちらは「おきかぜしゅう」と読み、平安前期の歌人で三十六歌仙の一人、藤原興風の和歌集です。当館でも活字化された『群書類従』や、影印本が収録されている『冷泉家時雨亭文庫』(1998年発行)を所蔵しています。このように平安時代の『興風集』が手に取りやすいのに対し、久坂玄瑞の『興風集』は復刻されたり全集に収録されたりといった活字化がほとんどされていないのは、残念なことです。



【参考文献】

- 『国書総目録 第3巻 補訂版』岩波書店 1990年
- 冷泉家時雨亭文庫編『資経本私家集(冷泉家時雨亭文庫)』朝日新聞社 1998年
- ジャパンレヅLib(当館契約データベース)

(辰巳 理紗)

編集後記

復刊「芸亭」も今回で第10号、ひとつの節目を迎えました。開館から本と人を結ぶイベントも数多く開催しました。昨年からの奈良県立図書館情報館出前講座・聖徳太子を学ぶ連続講座では館外に出前図書館を設置し、当館の職員が資料を持参してカード登録や貸出を行いました。館外に飛び出しての貸出は、職員にとっても新鮮でした。表紙写真は、今年度実施した図書展示の一例です。皆さんの食指を伸ばすことができるよう、新しい展示を考え続けています。これからも本誌を通して、まだ知られていない当館の魅力をお伝えしていきます。

(松村)

奈良県立図書館情報館報 芸亭 (うんてい復刊) 第10号

発行日 平成30年3月31日
発行人 千田 稔
発行所 奈良県立図書館情報館
〒630-8135 奈良市大安寺西1丁目1000
TEL.0742-34-2111 FAX.0742-34-2777